高齢者介護施設における暮らしのかたちと環境のかかわり
～4 施設 18 人のケーススタディーをとおして～

キーワード：暮らし，滞在場所，環境，
介護施設，観察調査

石井研究室　村上　晋平　　渡邊　千尋
佐藤　隆昭　　佐々木　教行
中込　寛太　　平澤　麻唯

１．研究の背景と目的

近年、介護を要する人たちが暮らす高齢者居住施設においては、「暮らし」を支える場としてのケアと環境のあり方が求められている。しかし、施設における高齢者の「暮らし」とは何か、となると、非常に抽象的で、わかりにくいものでもある。そもそも「暮らし」とは一人ひとり異なるものであり、一様にその姿や形を定義し、捉えることは難しい。本研究では、介護施設に居住する高齢者一人ひとりの「暮らし」をしっかりと見つめ、その状況を捉えることから施設における「暮らし」とは何かを考える基礎的な資料を得ることを目的とする。

その人の「暮らし」をかたちづくる要素、また規定する要素としては、その人にかかわる「人」や「もの」、また「空間」やその人自身の身体的な状況、暮らしている施設の種別など、さまざまなことが関係していると考えられる。それらの要素とその人の「暮らし」との関係を明らかにしながら、暮らしを支える環境のあり方を探る。

２．調査の方法

調査は、要介護の高齢者が暮らす4つの施設（A:従来型特別養護老人ホーム、B:ユニット型特別養護老人ホーム、C:小規模ユニット型特別養護老人ホーム、D:認知症高齢者グループホーム）において行った（図1）。それぞれ空間や施設運営の様態が異なる。2010 年 10 月 19 ～ 21 日の 3 日間、各日 6 名の入居者、計 18 名の入居者について、午前 7 時～午後 7 時まで行動観察調査を行った。各調査対象者に調査員 1 名が対応する形で追跡し、平面図上に、いつ、どこで、誰と、何をしたか、その状況に合わせて詳細に観察・記録をとった。

３．調査対象施設の概要

A 施設は多床室で構成された従来型施設である。従来は 4 人室主体でつくられたものだが、ユニット型の B 施設（全室個室 1 ユニット 10 人× 3）を増築併設することで、従来型部分の定員を減員し、4 人室を 2 人室として利用（13 室）し、一部は個室（9 室）として利用している。運営体制は A 施設は従来通り、食堂・リビング主体の従来型ケアとなっており、B 施設ではユニット単位でのユニットケアである。B 施設はユニット内の床が

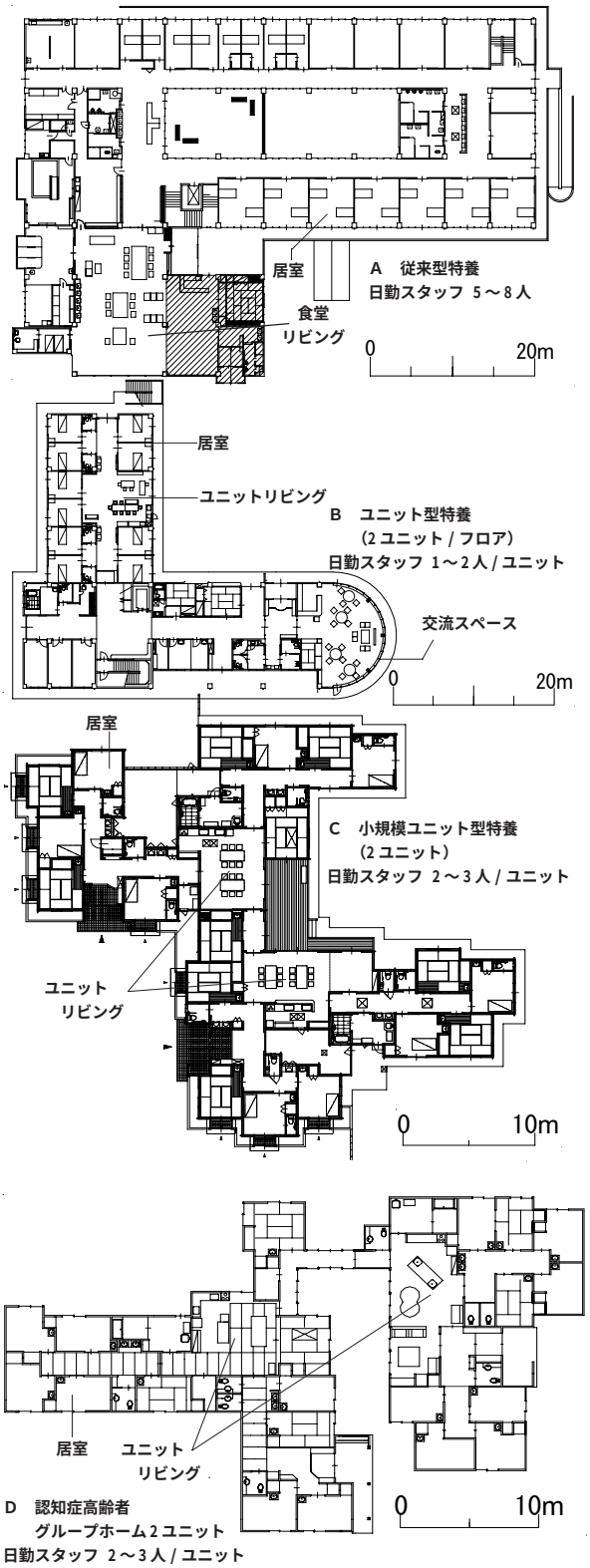


図１　調査対象施設の平面図

表１　調査対象者１８ 人の属性

施設記号/種別	入居者名	年齢	性別	入居日	介護度	認知症自立度	日常生活自立度	移動手段と介助	性格		趣味	起床時間	就寝時間	入居直前の居場所	入居前の家族形態	入居前の居住地
A 従来型特養	Ａ１	80	女	2006・10	4	Ⅲa	Ｂ２	車椅子介助あり	外交的	思考的	テレビ観賞、一人で過ごす時間、夫と再会、他者への気遣い、※日本舞踊、※唄	6:30	21:00	病院	夫婦	同一市町村15分車圏内
	Ａ２	89	女	2010・4	4	Ⅲb	Ａ１	歩行介助なし	内向的	感覚的	散歩、子守り、※お米とぎ、※総湯でおしゃべり	7:00	22:00	他GH	一人＋子同居	同一市町村15分車圏内
	Ａ３	83	女	2007・1	2	Ⅱb	Ａ１	歩行介助なし	外交的	直観的	裁縫、編み物、※お店の店頭・経営、※猫の世話	6:30	19:00	自宅	一人＋子同居	同一市町村5分車圏内
	Ａ４	71	男	2009・9	2	Ⅱb	Ａ１	歩行介助なし	外交的	感情的	買い物、新聞読み、地域の散歩道へのお出かけ、※お墓のお掃除とお参り	6:30	19:00	高齢者生活支援センター	姉家族	同一市町村15分車圏内
	Ａ５	94	女	2009・10	2	Ⅲa	Ａ１	歩行介助なし	外交的	直観的	趣味のものの収集と飾りつけ、※縫物	5:00	18:30	自宅	一人＋子同居	同一市町村15分車圏内
	Ａ６	86	女	2007・1	3	Ⅲa	Ａ１	歩行器介助あり	内向的	感情的	お茶をたてる事、※畑仕事、弟との面会、※体操	7:00	20:30	病院	独居	同一市町村30分以上
B ユニット型特養	Ｂ１－１	92	女	2005・11	3	Ⅱb	Ａ１	歩行器介助あり	外交的	感情的	編み物、娘の家へお出かけ、※ご飯の用意	8:30	22:00	ケアハウス	独居	同一市町村30分圏内
	Ｂ１－２	85	女	2010・6	支2	Ⅰ	Ｂ１	歩行介助あり	内向的	思考的	入浴、※ご主人の介護、※総湯での入浴	6:30	21:00	病院	独居	同一市町村15分車圏内
	Ｂ１－３	82	女	2010・8	3	なし	Ｂ２	車椅子介助なし	内向的	思考的	孫との交流、体調管理、※手毬やマフラー作り、※俳句、※お灸	8:00	20:00	病院	一人＋子同居	同一市町村30分圏内
	Ｂ２－１	89	女	2010・5	1	Ⅰ	Ａ１	歩行器介助なし	外交的	感情的	娘との交流、※散歩	7:00	20:00	ケアハウス	独居	同一市町村15分車圏内
	Ｂ２－２	80	女	2008・9	3	Ⅱｂ	Ａ１	歩行介助あり 車椅子介助なし	外交的	感情的	家事仕事、孫への気遣い、※喫煙、※仕事	5:00	21:30	自宅	一人＋子同居	同一市町村15分車圏内
	Ｂ２－３	92	女	2007・12	4	Ⅲa	Ｂ２	車椅子介助なし	外交的	感覚的	過去の仕事の話、政治や世間の動向に関心を持つ事	8:00	21:00	老健	一人＋子同居	同一市町村30分圏内
C 小規模ユニット型特養	Ｃ１－１	96	女	2008・5	4	Ⅱｂ	Ｂ２	歩行介助なし	外交的	思考的	洗濯たたみ、野菜の皮むき、畑（草むしり）、縫物	8:30	20:00	特養	一人＋子同居	同一市町村15分車圏内
	Ｃ２－１	77	女	2008・8	3	Ⅱｂ	Ａ１	車椅子介助あり	内向的	感情的	調理手伝い、洗濯たたみ、※共同浴場に行く、※他人の世話	7:00	21:00	自宅	独居	同一市町村5分車圏内
	Ｃ２－２	100	女	2009・9	2	Ⅰ	Ａ１	車椅子介助あり	外交的	思考的	新聞読み、※部屋の整理	7:00	19:30	自宅	子・孫夫婦	同一市町村10分徒歩圏内
D 認知症高齢者グループホーム	Ｄ１－１	91	女	2005・9	4	Ⅳ	Ｊ２	歩行介助なし	外交的	直観的	特になし、※編物、家事	7:00	20:00	自宅	独居	同一市町村5分車圏内
	Ｄ１－２	89	女	2007・1	4	Ⅳ	Ｊ２	歩行介助なし	内向的	直観的	編み物、塗り絵、煙草	12:00	22:30	自宅	一人＋夫婦	同一市町村15分車圏内
	Ｄ２－１	90	女	2009・6	4	Ⅲa	Ｂ２	歩行器介助あり	内向的	思考的	針仕事、※畑仕事、※工房でのタオルたたみ	7:00	20:00	自宅	一人＋子同居	同一市町村5分車圏内

※は、過去にしていたが現在は継続できていないこと

フローリングで構成されたB1 と、畳で構成されたB2　とがある。C 施設は学童保育を併設した地域密着型の小規模特別養護老人ホームである。8 名×２ユニットで構成された全個室のユニット型である。D 施設は認知症高齢者グループホームで、9 名×２ユニットで構成されている。2 つのユニットはその空間構成や床素材において違いがある。

４．調査対象者 18 人の属性と概要

表１に調査対象者 18 名の基本属性を示す。平均年齢は 87.0 歳で、男性が１名、女性が 17 名であった。入居年数を見ると平均２.３年となっている。長く入居している方で５年である。介護度別では、要介護度４の人が７名と最も多い。認知症は１名のみ「なし」だが、17 名は認知症で、重度の認知症レベルⅣも２名いる。18 名いずれも介護を必要とし、在宅生活が困難な利用者である。

入居前の生活場所は、自宅（8 名）もいれば、病院（４名）からの方もいる。入居前の暮らしでの家族形態も、独居（６名）もいれば、夫婦暮らし(1 名)、子世帯との同居（11 名）など様々である。

趣味や暮らしの中心となる活動について見ると、それぞれの個性が垣間見える。過去は行っていた、もしくはできていたが、施設入居や身体的な変化によりできなくなってしまったことなどがある。

５．調査から見える「暮らし」のかたち

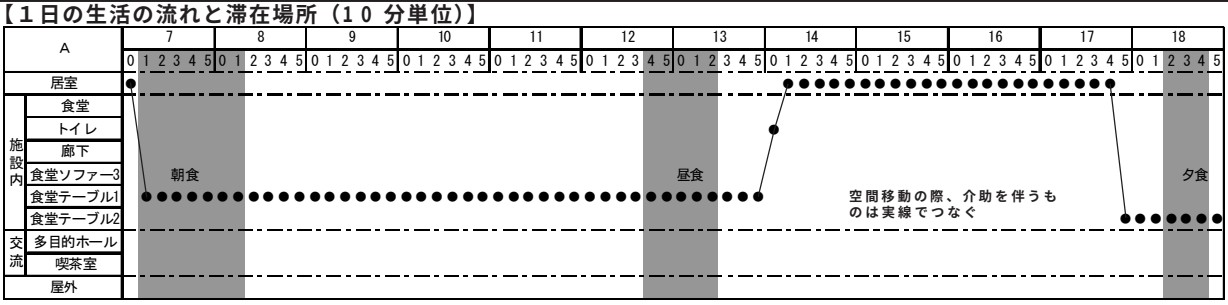
図２～６に 18 人のうち６人についての「暮らしのかたち」を示す。空間の利用様態、一日の暮らしの流れとそこでの活動や行為、特徴的な暮らしの場面で構成されている。

【A1 さん】は車椅子利用者で、１日の大半を食堂の決まった場所で趣味であるテレビを鑑賞して過ごす時間が多い。一人で過ごすことが好きな性格である。人との関わりは少なく、「テレビ」を中心とした物との関わりのもとに暮らしをつくっている。夕方以降では表情も緩み、自発的にスタッフや利用者に話しかけたり、周囲の人と関わるようになっていた（図２）。

【A4 さん】は施設内の空間を広範囲に利用して暮らしをつくっている。居室からリビング、リビングから交流スペースである喫茶室など長い動線の中で、各々の空間で目的を持った利用をする。自立での歩行が可能であるため、様々な空間を個性的に利用している（図３）。

【B1-1 さん】は特徴的で個性的な生活サイクルを持っており、その日によって行為、起床時間や就寝時間、滞在場所の割合も変化する。昔の仕事(内職)の名残が認知症になっても行為として現われ、紙を破いては貯めるような作業的行為を好んでいる。また、亡くなったご主人を呼ぶ行為(独

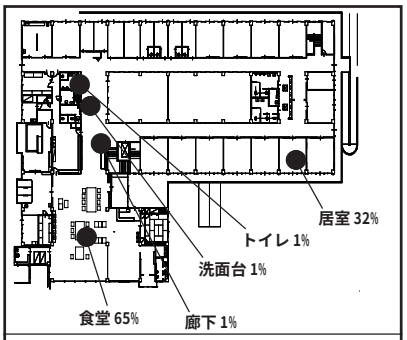
【１日の生活の流れと滞在場所（１０ 分単位)】



【１日の行動・行為（1 時間単位)】

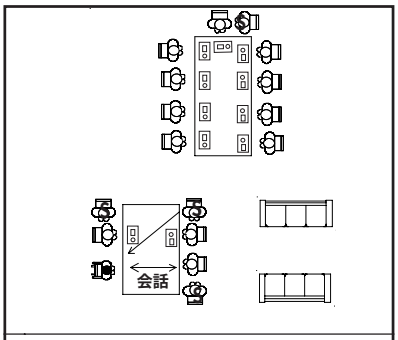
7	周囲との会話は特に無い。テレビを見たり周囲をきょろきょろと見渡す仕草もある。
8	スタッフに少し話しかけられるが、一言だけで会話が終わる。その後も大きな動きも無くずっと座っている状態。
9	スタッフから話しかけられて、うなずく動作はあった。スタッフと笑顔を一瞬かわす動作も見られた。
10	同じ場所にずっと座ってテレビを見ている。
11	場所や動きに変化は無い。人の声に反応することはある。
12	ご飯が運ばれてきた後もしばらくテレビを見ている。隣の利用者とスタッフを交えての会話。少し笑顔も見えた。
13	人と関わったり笑顔で話したりすることが増えてくる。52分にスタッフに足に薬を塗ってもらい、トイレに連れて行かれる。
14	居室
15	居室
16	居室
17	周りの人たちの会話に耳を傾け、微笑んでいたり、向かいに座る利用者と会話をしていた。
18	周りの人の会話に反応し笑うことはある。周りに対して笑顔で対応したり、自発的に話しかけたりしている。19時前部屋に戻る。

【１日の滞在場所割合】



一日の中では食堂での滞在が65%、次いで居室が32%であり、1日の約97%をこの2箇所で過ごしている。食堂での滞在場所も固定している。昼食後は居室に誘導されて戻り、夕食時まで過ごす。廊下は食堂と居室の行き来のみの使用で、洗面台は朝の時間、トイレは午後にスタッフに促されて使用した1度のみであった。

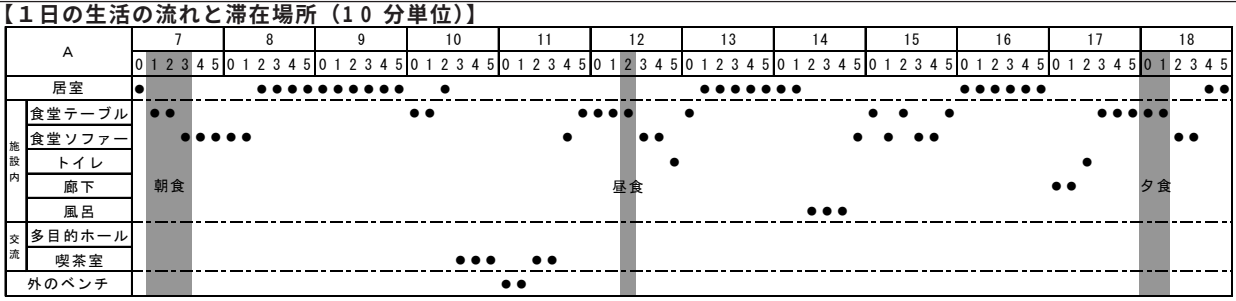
【暮らしの一場面：10/19　18:20～35】



この図は、夕食の時間、食堂のテーブルでの食事の場面である。向かい側に座っている人と会話などのかかわりを持つ。夕方までの時間を通して、ほとんど人との関わりや会話が見られなかったが、この時間になって表情を崩しながらの会話など、スタッフや他利用者との関わりが見られた。

図２　Ａ１さんの暮らしのかたち

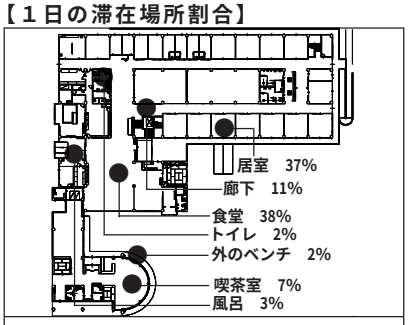
【１日の生活の流れと滞在場所（１０ 分単位)】



【１日の行動・行為（1 時間単位)】

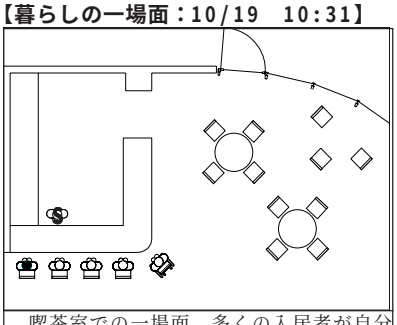
7	朝食を食べる。その後近くのソファーへ移動する。ぼーっとしたり、新聞を読んだりを繰り返し行う。
8	スタッフと笑顔で挨拶を交わす。8時半頃までソファーに座っていたが居室へ移動。
9	居室内。9時55分に居室から移動し、EV前にあるソファーへ腰掛ける。スタッフ数名と挨拶を交わす。
10	スタッフの方と行き着けの喫茶店の話をした後に、施設内にある喫茶室へ移動しコーヒーを飲む。
11	喫茶室から施設敷地内の外にあるベンチへ移動。10分程度で喫茶室に戻り、スタッフと会話。
12	昼食を食べる。食後ソファーへ移動し、ぼーっとする。スタッフ4名と挨拶をする。
13	EV前のソファーの違う席へ移動する。13時5分に居室へ移動。居室内。
14	スタッフと一緒に風呂へ行く。その後、デイサービスのエリアに行き、うろうろしすぐに戻ってくる。
15	スタッフに足の塗り薬を塗ってもらう。EV前のソファーへ一瞬座った後、トイレに行き居室へ移動。
16	居室内。
17	EV前ソファーへ移動し手に持っていた帽子を見る。食堂に移動し、スタッフへあいさつをする。
18	夕食を食べる。周囲を気にしながら、利用者の誰よりも早く食べ終える。トイレに行き居室へ移動。

【１日の滞在場所割合】



A4さんは食堂を中心として、施設内・施設敷地内を広範囲に行動していた。食後は必ず居室に戻り自分の時間を過ごす。居室の滞在割合が食堂での割合とほぼ同じである。廊下での滞在割合も高い（11%）が、移動の際に、EV前に設置されたソファーへ腰掛けスタッフの行動を気にしたり、あいさつをしたりするという行為が見られたためである。施設の広い空間を使って暮らしをつくっている。

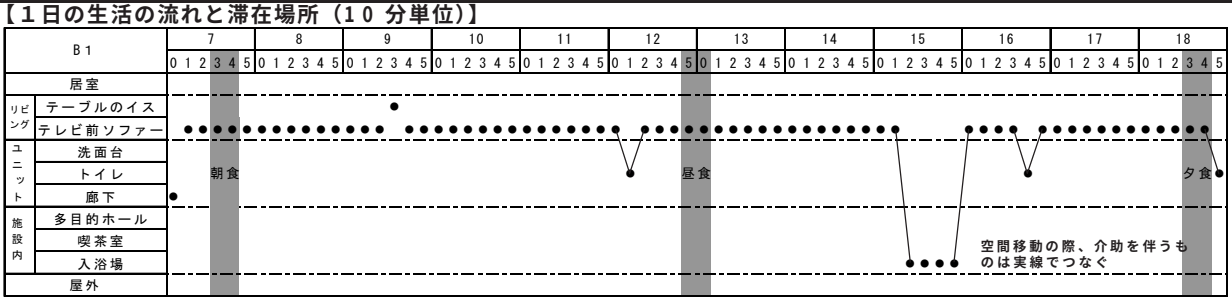
【暮らしの一場面：10/19　10:31】



喫茶室での一場面。多くの入居者が自分の時間を過ごしている中、A4さんは施設内の喫茶室へ移動し、入口に一番近い椅子に座る。スタッフから「コーヒー飲む？」と聞かれ、頷く。コーヒーを飲んでいると後から入ってきたスタッフに話しかけられ、30年以上のお付き合いがある行きつけの喫茶店についての会話が数分続いた。喫茶室には多くの他の利用者も訪れており、周囲を気にする場面が見られた。

図３　Ａ４さんの暮らしのかたち

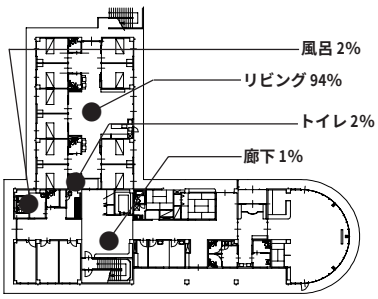
【１日の生活の流れと滞在場所（10 分単位)】



【１日の行動・行為（1 時間単位)】

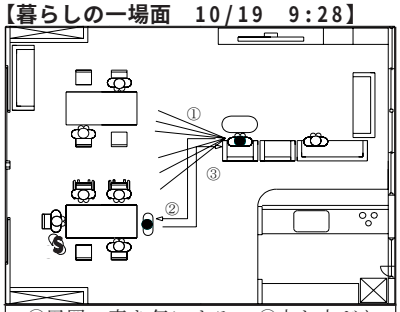
7	テレビ前のソファで所持するバックの中身を全部出し始める。
8	食後、何度も中身の出し入れする行動を約１時間繰り返す。
9	25分頃、新聞を読んでいた利用者(B1-2さん)の場所まで一人で移動し、新聞紙を頂く。破き始める。
10	黙々と新聞紙を破く。テレビや他の人・物には全く興味を示さない。序々に真剣になり、笑みがなくなる。
11	他の利用者が外に行っても、黙々と新聞紙を破く。夢中の状態。
12	スタッフに誘われトイレに行く。30分に「じいさん、ハサミないか」と独り言を言う。50分頃、昼食を始める。
13	紙の塊を食べようとする。お金と言っていた物が、昼食を挟んだことで食べ物と認識したらしい。
14	周囲の物音などを気にし始め、独り言程度に「風呂に入りたい」や「じいちゃんお風呂まだ？」と言い出す。
15	20分頃にお風呂に行く。嬉しそうな表情で戻って来て、洗面台でドライヤー・クシを一人で使う。
16	眠いのか、目をつぶっている時間が多く、40分頃から周囲を気にする。スタッフに誘われトイレに行く。
17	10分頃からポケットに入れていたティッシュを破き始める。
18	15分頃「じいさん、夕食・風呂は？」と独り言を言う。30分頃に夕食が始まる。50分頃、スタッフに誘われトイレに行き、居室に入っていく。

【１日の滞在場所割合】



スタッフのヒアリングからは、B1-1 さんには約 3 日間で 1 つの生活サイクルが存在するという。歩行器を使い 1 日施設内を移動する日、調査日のように 1 日中リビングに篭って(94%）紙を破くなど、特徴的・個性的な行為を続ける日、1 日中居室で眠っている日など、その日によって行動様態や利用場所が大きく変化する。起床時間や就寝時間も、その日によって大きく変化する。

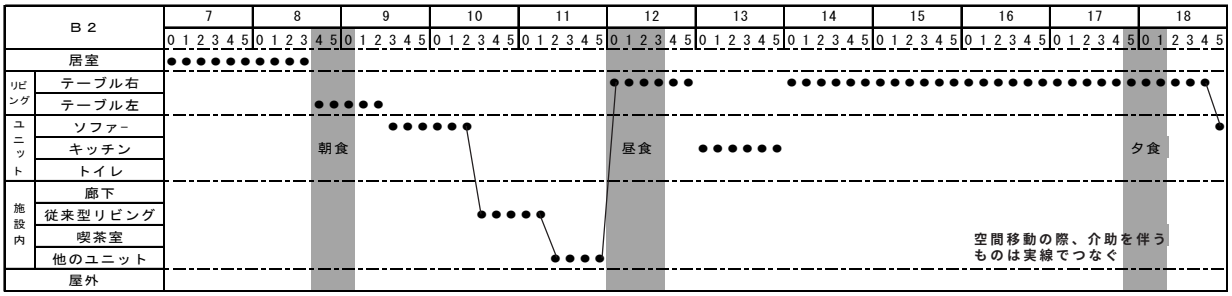
【暮らしの一場面　10/19　9:28】



①周囲の声を気にする。②立ち上がり、テーブル側にいる利用者(B1-2 さん)の場所まで移動し、話しかける。そこで利用者(B1-2 さん）が読んでいた新聞をもらい、ソファーまで戻る。③そして新聞紙を破くという作業(特徴的 / 個人的行為)を始める場面。昔、内職の仕事をしていて「作業する＝お金になる」という名残が今でもその行為に現れている。認知症ではあるが、施設の暮らしの中で過去の生活が一つの特徴的な行為となって現れている。

図４　Ｂ１－１さんの暮らしのかたち

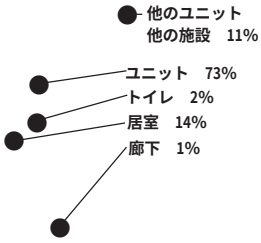
【１日の生活の流れと滞在場所（10 分単位)】



【１日の行動・行為（1 時間単位)】

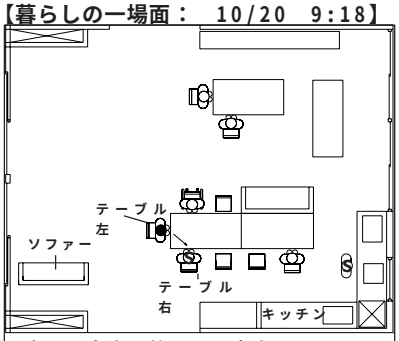
7	居室で就寝中。
8	起床後洗面台にて髪をとかしながらスタッフと会話。朝食は食欲旺盛でごはんをおかわりしている。
9	スタッフが隣で朝食を食べていて会話になる。他の入居者を気に掛けることが多い。スタッフに洗濯物をたたんでと頼まれソファに移動したたみ始める。
10	従来型の食堂へ行くことに。知っている人が全然いなく不安そうな顔をしているが他の入居者との会話で笑顔が見える。
11	仲良くなった男性の入居者が帰ることになり自分も移動。B1 にお邪魔することに。服をいじったり落着きがない。
12	昼飯を食べながらスタッフと会話している。やり取りが漫才みたいで楽しい会話になっている。
13	食器洗いを自発的に行っている。食器洗いが終わった後もやることを探している。
14	スタッフとの会話に対して、わざとらしく「大したことない」とユーモアあふれた答えを返していた。
15	スタッフが洗い物をしているのを見て気に掛ける。歌を歌いだしたがすぐやめてしまった。その後は右隣の方の世話をしている。
16	また洗濯物を頼まれ黙々とたたむ。たたみながら他の入居者やスタッフに話しかけたり心配する様子を見せる。
17	立ち上がりどこかへ行こうとするがスタッフから止められ、自分の思ったとおりに動けずスタッフに罵声を浴びせる。
18	床に物をこぼしたのでいすの下にもぐり床を拭いているが、椅子に座れず四つん這い状態になっている。

【１日の滞在場所割合】



リビングに73%、居室に14%の滞在などで、ユニット内での滞在が一日の 9 割近くを占める。リビングでの滞在のうちテーブル(右）で61%を過ごす。スタッフの誘導で他のユニットに行って過ごす場面も見られた(11%)。スタッフにお願いし車椅子でお茶を飲みに喫茶室へ行ったが開いていなかったため、従来型 A 施設の食堂に誘導されて過ごした。

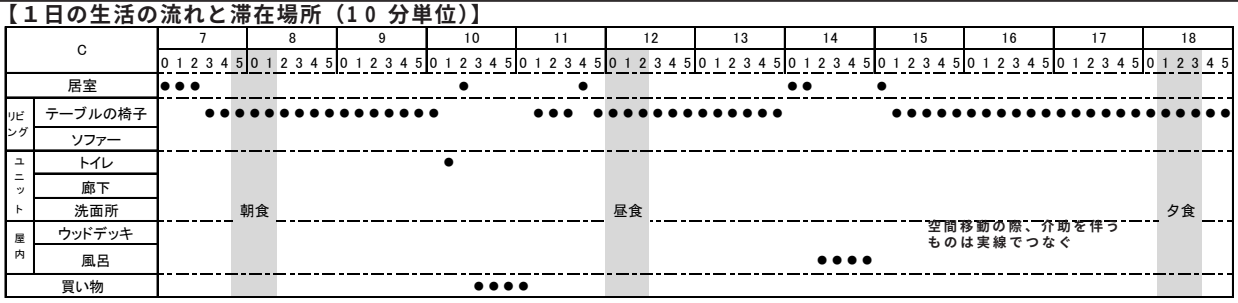
【暮らしの一場面：　10/20　9:18】



自らは食事を終えて、食事をとるスタッフを見ている場面。スタッフが「いただきます」と言うと、「どうぞ」と返すB2-2 さん。スタッフの行為を気にかけながら、積極的にコミュニケーションをとる。この後も楽しげにスタッフと会話を楽しんでいた。同じテーブルに座る他の利用者とも会話が起こる。

図５　Ｂ２－２さんの暮らしのかたち

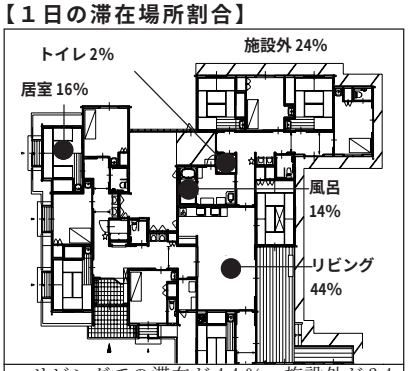
【１日の生活の流れと滞在場所（10 分単位）】



【１日の行動・行為（1 時間単位）】

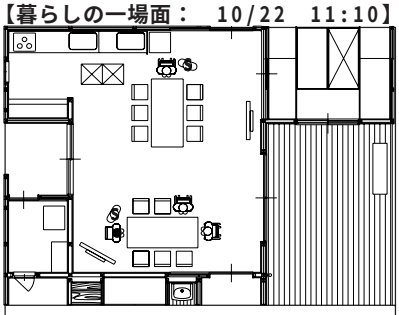
7	自分で起きてきて朝食を食べ始める。
8	ご飯を食べ終えて薬を飲む。外に干していた布団がずれていたのでそれを直しに行く。
9	テレビを見始める。手のストレッチなどをたまにする。テレビのリズムに合わせてリズムをとっていた。
10	スタッフさんと誕生日ケーキを買いに行くため部屋に戻って準備をし始める。準備ができると、買い物へ出かけた。
11	買い物から帰ってきて、買ってきたズボンの裾上げを自分でし始める。できると、嬉しそうにリビングを動き回ってた。
12	昼食の準備ができたので自分のイスへ座る。スプーンを使って食べる。ご飯を食べ終えて他の利用者さんと会話をする。
13	隣の利用者さんからふきんを渡されテーブルを拭いてた。広告や新聞を見たりしている。新聞のテレビ欄に赤ペンで印をつけていた。
14	お風呂に入るため部屋に戻り着替えを持ってくる。その後お風呂に介助無しで入る。
15	誕生日ケーキが運ばれてくると喜んでいた。みんなにハッピーバースデイを歌ってもらいとても喜んでいた。
16	スタッフさんに野菜の皮むきを手伝って欲しいと言われ皮むきを始める。ジャガイモの皮をむき、目も丁寧にとっていた。タマネギの皮もむいていた。
17	通販CMの電話番号をメモする。テーブルの上に手を置きテレビのリズムに合わせ体を揺らしている。
18	ご飯ができて箸でご飯とサラダ、シチューをバランス良く食べる。食べ終わり、食器を片付けお茶を持って来る。

【１日の滞在場所割合】



リビングでの滞在が４４％、施設外が２４％、居室が１６％などとなっている。調査日が誕生日だったため、スタッフと２人で外出して、ケーキなどを買いにでかけた。リビングではテーブルの特定の場所で過ごす。移動は自立しており、居室を行き来しながら一日の暮らしをつくっている。居室での滞在は、着替えや外出の準備などでの利用である。

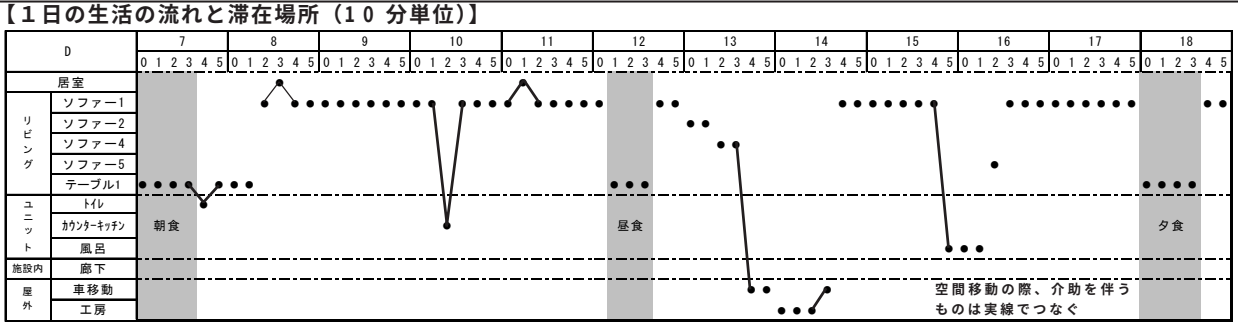
【暮らしの一場面： 10/22 11:10】



買い物から帰ってきて、誕生日プレゼントで購入したズボンの裾上げを始める。最初に針に糸を通せず苦労していたが、スタッフがそれを見て手伝う。その後は、１人で器用に針を使い裾上げを行っていた。以前から、このような細かい家事作業が趣味だったという。裾上げが終わると、居室に戻り完成したズボンを履いて嬉しそうにリビング内を歩き回っていた。

図６　Ｃ２－１さんの暮らしのかたち

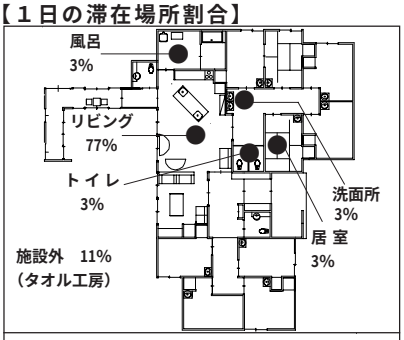
【１日の生活の流れと滞在場所（10 分単位）】



【１日の行動・行為（1 時間単位）】

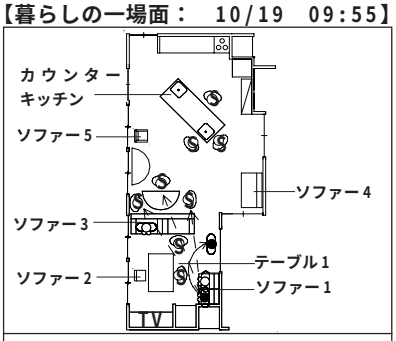
7	薬を飲ませてもらう。チャイムがなると立ち上がり玄関を覗き込む。
8	スタッフをみている。チャイムがなると立ち上がり玄関を覗き込む。
9	ひとりになると、スタッフをみたり落ち着かなくなりキョロキョロしだす。
10	ソファーへ戻ろうとするが、途中どこへ行くのか忘れ、スタッフに誘導される。
11	居室のそうじ。話しの途中に玄関のチャイムがなると覗き込む。
12	食事中もスタッフ同士の会話を気にする。他の利用者よりもスタッフを気にする。
13	スタッフに今何してる？や、これからなにする？など声をかけている。
14	お客さんが来てスタッフが慌ただしくなると落ち着かない様子。
15	スタッフ同士の会話を気にしている。入浴はすべてスタッフのサポート。
16	夕食作りで慌しくなったスタッフを気にする。
17	お客が来ると、扉の隙間から覗く。
18	夕食を自らはしで食べる。隣が見ている方向を気にする。

【１日の滞在場所割合】



ユニット内だけではなく、施設外での活動もあり一日の活動・行動範囲は広い。ユニット内では多くをリビングで過ごしている（77%）。リビング内の特定のソファーで多くの時間を過ごす。移動の自立度は高いが、行為の誘発には誘導が必要となる。ソファーでは、スタッフや利用者の行動を常に伺っている。スタッフやデイサービスで訪れる特定の方と会話を交わす。

【暮らしの一場面： 10/19 09:55】



会議が始まりスタッフがリビング内へ集まる。リビング内に話声が広がり、にぎやかになると落ち着かなくなり、声や物音のする方向を気にする。隣に座っている入居者が話をしていても、スタッフ同士の会話が気になり話を聞かなくなる。玄関のベルがなると、自ら立ち上がり玄関を覗き、誰が来たのか確認する。スタッフの会議が終わると、隣に話しかけ、会話を続ける。

図７　Ｄ１－１さんの暮らしのかたち

り言程度）も多い。日によってリズムに違いはあるが、調子がよい時は積極的にスタッフや他の利用者に挨拶をするなど社交的で、周囲の方からも人気がある。スタッフからの誘導による行為の誘発が多いが、自立度は比較的高いこともあり、歩行器を使い自由に移動する。移動中は常にバックを持ち歩き、私物を常に身につけている（図4）。

会話が好きな**【B2-2さん】**。B2-2 さんは社交的で、自らスタッフや他の入居者に話しかけ、会話を楽しむ場面が多く見られた。そこで起こる場面や行為に対応した的確なコミュニケーションが成立している。自分の安定したい場所、家庭的なスケールのリビング空間が落ち着いた暮らしを成立させていると考えられる（図5）。

【C2-1さん】は自発的に行為も移動も行っている。ズボンの裾上げなどの細かい手作業も自ら行う。入居前は旅館の仲居をしていたこともあり、その時に使っていた衣装箱に着物などを大事に入れている（図6）。

【D1-1さん】の暮らしはスタッフとのコミュニケーションを中心につくられている。他者との距離が近くなる空間構成のため、スタッフの動きが常に視界に入る。そのため、スタッフの行動や会話を気にし、反応を示す。空間規模、家具の配置などにより他者を常に感じることになる。一人でいることを好まず、他者との中にいることで落ち着きを得ているようである（図7）。

以上見てきた6人を含む調査対象となった18人の暮らしのかたちとその特徴から、その暮らしを構成する要素を抽出することを試みたものが表2である。ここでは、「人」「もの」「空間」「認知症」「生活歴」「身体様態」を軸に分析した。

「暮らし」をかたちづくる要素は人それぞれであることがわかる。テレビが暮らしや行為の中心となるC1-1さん（もの）、一人でいることを好まず常に他者の傍にいることを望むD1-1さん（人）、空間の利用に特徴が現れるA4さん（空間）、認知症の症状の中に、過去の経験が特徴的な行為となって表れるB1-1さん（認知症/生活歴）、特定の場所での滞在は少なく、広い施設空間を移動していることが多いA3さん（認知症/空間）、合掌しては独り言を呟くB2-3さん（認知症/身体状況）など、18人18様の暮らしのかたちが明らかになった。

一人ひとりの個性が表出される一方で、それぞれの施設が持っている環境的、運営的な状況が暮らしのかたちに影響を及ぼしているであろう場面も見られた。たとえば、A施設では空間が広く移動空間に自由度がある一方で、広すぎる空間は落ち着いていること、特定の落ち着く居場所を見つけることが難しく、徘徊的な行為を生み出しているとも考えられる。食事は決められた時間に一斉に取るスタイルで、施設がつくる暮らしの枠に一人ひとりの暮らしがあてはめられている部分もある。

表2　暮らしを構成する要素と18人の特徴

対象者	人	もの	空間	認知症	過去の生活歴	身体の状態
A1		●			●	
A2				●	●	
A3				●		●
A4			●	●		
A5	●	●				
A6						●
B1-1				●	●	
B1-2	●					
B1-3						●
B2-1			●		●	
B2-2	●					
B2-3			●	●		
C1-1		●			●	
C2-1		●			●	
C2-2	●				●	
D1-1	●					
D1-2		●			●	
D2-1	●		●			●

対照的にD施設では、就寝・起床時間、それに合わせた食事の時間なども個々の暮らしのリズムに合わせられている。生活の範囲も施設内にとどまらず、地域に展開していて、暮らしに幅が生まれている。

C施設では併設する学童保育での子どもたちの活動の様子が時折感じられ、暮らしに日常的な雰囲気が生み出される。

B施設ではユニット内が落ち着いた居場所となり、他者との距離が近くコミュニケーションしやすい環境がある一方で、閉鎖的で閉じた暮らしに陥る危険もあるが、ユニット外にある喫茶スペースや併設するA施設がその受け皿となる役割を果たしている。

いずれにしても、個々の暮らしと施設のあり方、その環境のあり方とが、直接・間接的にかかわりあっていることが18人の事例調査を通して明らかになった。

６．まとめ

今回の調査では、18通りの「暮らし」と、一人ひとりの「暮らし」を支える環境要素とのかかわりを明らかにした。「暮らし」を支えるという視点からの介護施設のあり方を考えるにあたっての基礎的かつ貴重な資料を得られたものと思われる。一人ひとりの個性や「暮らしのかたち」の違いを包み込めるような施設環境やケアのあり方を考えていくことが重要であろう。